

訳者インタビュー

人間ジョブズのすべて

井口耕二

去る10月5日、スティーブ・ジョブズが亡くなった。アップル社を率いてパーソナルコンピューターのマッキントッシュや iPod、iPhone、iPad などの革新的な製品を次々と世の中に送り出したほか、ピクサー社からフルコンピュータグラフィックスによる長編アニメーションをヒットさせるなど、我々の生活をさまざまな面で大きく変えた人物である。ニュースなどでも大きく報道されたのでご存じの方も多いただろう。

このたび刊行された『スティーブ・ジョブズ (I・II)』(ウォルター・アイザックソン著、拙訳)は、そのジョブズが全面的に協力して書かれた初の公認評伝である。

アップルを創業し、一代で時価総額世界一にまで育てた人物、次々と革新的な製品を世の中に送りだした人物としてしかジョブズを知らなかった人は、本書を読んで驚かれるはずだ。

まず、生まれた直後に養子に出され、生みの親に捨てられたという想いを抱く。同時に、養親がとてよくしてくれたため、「選ばれた」「自分は特別である」という想いも抱く。これがジョブズという人間の形成に大きな影響を与えたのはまちがいない。小学校から高校にかけてはいたずらの武勇伝が数知れず、高校時代には、大学生の友人、スティーブ・ウォズニアックが開発したブルーボックスという長距離電話をただがけできる装置を売ってあるいたこともある。大学は、必修科目がいやで中退し、興味のある科目だけをもぐりで聴講する。果物中心のベジタリアンなら

体臭などしないと信じてシャワーも浴びない（もちろん、ひどい
においに周りはたまったものではなかった）。東洋思想に傾倒し、
インドを放浪して歩き、のちには禅に傾倒して出家まで考えてい
る。

会社を興したあとも、すぐにかんしゃくを起こす、思い通りに
ならないと泣くなど、いわゆる「できる人物」のイメージと逆行
するような面が多い。現実を無視する「現実歪曲フィールド」を
まとうなど、ふつうに考えれば、会社の経営者として絶対にやっ
てはならないはずのことをよくする。

このあたりがあまりにひどすぎると、1985年、30歳で自分が
創業した会社を追いだされてしまう。

当然、失意の底に沈むが、それでも自分はコンピューターが好
きだと気づき、別のコンピューター会社、ネクスト社を創業す
るとともに、コンピューターアニメーションに使う特殊なコン
ピューターを作っていたピクサー社を買いとる。そして、自分が
思うままに両社を経営するが、出す製品、出す製品、すべてで圧
倒的な敗北を喫してしまう。唯一の例外が、コンピューターの能
力を示すデモ的な位置づけで作っていたアニメーションで、『ト
イ・ストーリー』をはじめとする大ヒット作品を次々と生みだした。

ネクスト社は事業的には失敗だったが、そのオペレーティング
システムを欲しがったアップルが会社ごと買収。それに伴い、ジョ
ブズは12年ぶりにアップルに返り咲いた。

ネクストやピクサーにおける失敗で成長したジョブズは、その
後、iMac、iPod、iTunesストア、iPhone、iPadなど、次々と大ヒッ
トを飛ばす。だが人間が円くなったわけではなく、二流だと判断
した社員を厳しく叱る、すぐに首にするなど、激しいところは変
わらなかった。

このようにジョブズの人生は波瀾万丈で、読んでみると、「どうしてこんな人が成功したのか」と思うと同時に「こんな人だからこそ成功したのかも」とも思ってしまう。

そんなジョブズだが、じつは取材嫌いであり有名であり、特にプライバシーに関することは神経質ほど公開を拒んできた。そのため、過去に何冊も書かれている伝記はすべて非公認で、ジョブズ本人への取材はもちろん、ジョブズに近い人々への取材もおこなえない状態で書かれた。その彼が遠くない死を前に、友人である著名な伝記作家、ウォルター・アイザックソンに頼む形で本書の執筆はスタートしたという。

前述のように、ジョブズはきらめくような側面といわば暗黒面とを持つ。本人公認では暗黒面がすべて削除され、美談化されているのではないかと懸念する人もいるが、本書はジョブズのよい面も悪い面もあますところなく描いている。ジョブズ自身、内容に口は出さないと最初に宣言しているし、敵や元ガールフレンドなどにも取材に協力してくれと声をかけ、客観的なジョブズ像が得られるように協力しているのだ。ジョブズとともに歩み、がんとの闘病を助けて支えた妻、ローリーンも、真実を語ってほしいと著者に頼んだそうだ。

「彼の人生や性格には、どうにもめちゃくちゃな部分がありますが、それが真実ですから。それをごまかす必要はありません。彼は操るのが上手なんです。でも同時に、注目に値する並はずれた人生を歩んでも来ました。それらを、すべて、うそ偽りなく語っていただきたいと思います」

プライバシーの公開を強く拒んできたジョブズが評伝に全面協力しようと思ったのは、「父親らしいことをあまりしてやれなかった子どもたちに自分の姿を伝えたかったから」だという。だから

こそ、ものすごく怖いと思いつつ、プライバシーを含むすべてを明かしたというのだ。

ジョブズ本人やその家族、近しい友人などをも含む百人以上にインタビューして構成された本書が、ジョブズに関する従来の評伝とは一線を画する深いものとなっているのは当然だと言えるだろう。

2004年夏に膵臓がんの手術をしたあと、がんは治った、いや、治っていないのではないかとさまざまなうわさが飛んだ。ジョブズが次第にやせてゆくのだからそれも当然だが、病状がどうなっていたのか、また、どのような治療をおこなっていたのか、事実としてあきらかにしたのも本書が初である。もちろん、そのときどきで、ジョブズ本人が何を思っていたのかも、だ。

家族との関係が詳しく描かれているのも本書の特徴だ。父親として、息子や娘、それぞれとどう接していたのか、また、彼らからどう「逃げて」いたのかが克明に描かれている。そして、そんな父親、ジョブズを妻がどう見ていたのか、また、どう支えていたのかも描かれている。家庭人として満点がとれるような人物ではないのだが、そこも含めてジョブズという人間のすべてが描かれているわけだ。

大好きなこと、自分が情熱を持てることを追求し、走りつづけた男。56年という短い生涯ながら、企業社会の偉人、数人分もの業績を上げるほど猛烈な勢いで走りつづけた男。逆に、気に入らないことは意識や視野から追いだし、ないものとして無視しつづけた男。そしてその結果、わずか一代で世界一の会社を作りあげてしまった男。「事実は小説よりも奇なり」というが、本書はそういう一冊だと思う。これだけめっちゃくちゃなことをする人が一代で世界一の会社を作るなど、フィクションであれば、荒唐無

稽であり得ない話と切り捨てられてもおかしくない。でも、それが事実——ひとりの男が生きた人生の記録なのだ。

(いのくち・こうじ 翻訳家)

(PR誌『本』12月号掲載)